

古畑のそばの立つ木にゐる鳩の友呼ぶ声のすぎき夕ぐれ

西行

『新古今和歌集』「雑」の一首。

「そば」は「岨」、つまり山の斜面や崖。「鳩」は山鳩。

「荒れ果てた古畑の、崖に立つ木に止まっている鳩の友を呼んで鳴く声が、ぞっとするほどの寂しく聞こえる夕暮れどきだなあ」

夕暮れの山路を行く場面だろう。荒涼とした「古畑のそば」のあたりの木に、山鳩が止まっている。「友呼ぶ声」には、飢えや怖れとはどこかちがう、深くもの寂しい声が想像される。小さな命を慈しみながら、自然を身に近く感じとった西行らしい表現である。それは同時に、一人旅ゆく孤独な心理の投影なのかもしれない。

月や花の歌ほどには知られない一首であるが、この歌にはじつに注目すべき言葉がある。それは「すぎき夕ぐれ」の「すぎき」。



さいきんでは、「キモイ」や「カワイイ」と並んで若者に連発される「スゴイ」。「スゴイおいしい！」とか「これスゴくない」とか、どちらかといえば喜ばしいほうの驚きや感動に使われる。むしろ使われ過ぎていて、

しかし本来は、ぞっとするほど寂しい、怖ろしいなど、まさに凄みのある荒涼感を表現する言葉。和歌ではほとんど用いられることのなかったこの言葉を、西行は好んで使っている。

歌集『山家集』には、次の歌も見られる。

夕されや檜原ひばらの嶺を越え行けば凄くきこゆる山鳩の声
素朴な表現のなかで、「凄くきこゆる」がなんともいえない不穏な力を帯びている。

謎の多い人生を旅人として生きたこの歌人の言語感覚には、荒涼もまた自然の美として享受する、独自の自然観があったにちがいない。

後鳥羽院の歌論書である『後鳥羽院御口伝おのくちでん』には、「西行は生得の歌人、不可説の上手なり」と記されている。

西行はやはり、スゴイのである。(小島ゆかり)